

揺らぐ安全神話

柏崎刈羽原発

東京電力柏崎刈羽原発建設当時既に存在していた活断層疑惑。初の原発震災を引き起こした中越沖地震は疑惑を再燃させた。東電は五日、地震後の海域調査を踏まえ、柏崎刈羽原発の設置許可申請時の評価を覆して活断層と認めた。同時に、二〇〇三年には原発周辺の海底に活断層の疑いがある断層七本の存在を把握しながら公表せず、隠い体質を露呈した。

柏崎刈羽原発反対地元三団体の佐藤正幸(六三)は「立地場所を決めてから東電が地盤を調べる。途中で地盤の劣悪さが指摘されても後戻りせずに安全審査は進んだ」と国への不信感を語る。「一号炉真下に断層 新

地盤論争再燃

中越沖で活断層発覚

国の審査に不信 廃炉論も

県に判断求める

潟大教授が判定「東電側理解されないのか」と苦悩は確認せず。東電が柏崎原発建設の用地買収をほぼ終えようとしていた一九七四年八月、本紙は社会面トップで報じた。六九年の誘致決議と相前後して各地に反対組織が結成されていた地元には衝撃が走った。この「地盤は劣悪」と早くから

七四年十一月、小林は一つの決断をする。住民の地盤に対する不安に応え、国への設置許可申請の手続きに待ったをかけた。東電に申請保留を申し入れ、第三者の県に地盤問題の判断を求めた。県は翌七五年一月、小断層はあるが工学的に「小断層はあるが工学的に

「角米の地盤だ」

主張。後に活断層の存在を指摘した。現在、最高裁で係争中の一号機設置許可取り消し訴訟に発展する。

小林自身に地盤への不安はなかったのか。長男正明は「父は孤立無援の中で頑張り通した。実際、ぐらぐらしたときもなかったわけではない。説明すれば分かるというスタンスで、市民の合意を重視した」と話す。

柏崎商工会議所の前専務理事・内藤信寛(六七)も「反

世界最大級の柏崎刈羽原発に初めて大きな震災を引き起こした中越沖地震は、国の安全審査への信頼性を根底から覆し、「廃炉論」まで出ている。その激震は、原発直下の活断層をあらわ

出、「砂上の原発」の存在。続基盤を大きく揺るがせている。(文中敬称略) 〓おわり〓

次回シリーズは一月一日付から「原発の安全審査」をテーマに掲載します。

ぜな未開の砂丘地に

< 5 >

角米の地盤だから反対運動はひびくならないと思つたのだ」と振り返る。

の浜辺で開催された反対派の大集会。原発敷地周辺の活断層の存在をめぐり、東電と国を相手にした激しい地盤論争が繰り広げられた。一九七四年七月、柏崎

市荒浜



原誘致を実現した柏崎市長・小林治助(故人)は苦況に立たされる。自宅には脅迫電話も掛かってきた。小林の長男正明(六三)後に治助に改名は「おやじは『誘致に動いた』選択が本当に正しかったのか。これだけ説明してなぜ

1号機訴訟の一審で原告団長を務めた元県議の田辺

◆主な参考文献 順不同 評伝柏崎市長小林治助(吉田昭二)明日への創造(柏崎商工会議所「柏崎市史」(同市「東京電力三十二年史」(東京電力「関東の電気事業と東京電力」(同「田中角栄研究全記録」(花隆「泥田の中から」(田辺榮作「田中角栄の元側近36年目の衝撃証言」(森書房「現代・2003年5月」)ほか。